分館だより

"おばあさん"冥土の土産にひと走り

小杉分館で"運動"会

雨が降るのか。降らないのか。午前6時、天気予報は時々雨夕方になって晴れると云う。

今日六月十二日（日）小杉分館主催の小杉藤駒の村民運動会、青年会、野球O連盟、分館役員が分館に集まって空を仰いでの協議。空は、今にも降り出しそうな雲である。

私は迷いながら屋内運動場に入ってみた。

前日、前々日から青年団員が一生懸命準備した道具が、整然と並べられて出番を待っていたのだ。「よし、やろう！」この時、私の気持ちは決った。

皆が一斉に動き出した。その時ちょうど、6時30分であった。農協の有線放送で決行の放送を依頼した。運動会は誠に和やかなものだった。

天気も良くなり、青空がのぞいてきた。小学生、中学生、青年会、婦人会、一般向と種目もいろいろ、ここにも青年団の苦心がうかがえた。

迷競技、珍プレーが続出、会場をやんやと沸かせるものであった。競技も半分以上過ぎまる時でした。「メイドの土産にオレことも走らせてくんなせや。」と二人のおばあさん（82～3才）が飛入参加。

レースに一層の花を咲かせた

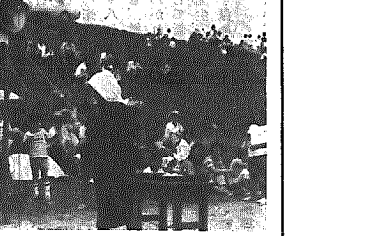
スタートライン、「ヨーイ、ドン！」その時はもう、おばあさんは「オレ足がおそいすけ先に行くわね。」と5～6尻先に出ていた。顔をまっ白にして、かたくり粉の中のアメを捜しているおばあさんの姿を見て私は、これが本当の村民運動会のあるべき姿なんだと「おばあさん、ありがとう」と心で感謝していたものである。そして、運動会の最後を飾る部落対抗年代別リレーは、バトンの替わりに長靴を履き替えるリレーである。

小学生一年生か十一文の長靴を履いて、我部落の名誉を賭けて走る様は誠にいじらしく、又こっけいであり、今にも前にのめりそうで皆がハラハラする場面であった。

雨に降られることなく、運動会は終りました。帰る人も少なく閉会式もりっぱに出来ました。この運動会を開催するにあたって、企画から後始末までやってくれた青年団員の皆さん、婦人会、野球O連盟の役員、そして農協を始め各部落からの暖かい援助、ほんとうにありがとうございました。

紙上を借りましてお礼を申し上げます。来年度は、もっと楽しい全員参加の運動会をやりたいと思っています。

小杉分館長　今井源吾



口に粉をいっぱいつけてゴールイン

よい仲間、よい環境が人をつくる……。

ひとりぼっちよ、サヨナラ——

子ども会や青少年団体、学校のクラブなどに入っている青少年は、ほとんど非行には走らない、というデーターがあります。親の立場からすれば「勉強をして頭の良い子になってほしい」「ケガをさせたくない」「悪い影響を受けさせたくないため、家の中におきたい」などと考えることもムリからぬ話しかも知れませんが、ことしの夏は団体活動に理解を持ち、思い切りのびのびとスポーツや文化活動に参加させていただけません か。

そのことが、カラダをじょうぶにするだけでなく、生活のきまりを覚え、他人と仲良く生活することの大切さを知った立派な若者に育つ栄養素になるはずです。

それからいまひとつ—。子どもに良くないと思われる物があったら、子どもの目を目かくしするだけではなく、親をはじめ、大人自身が、そういうものを買ったり、見たりしないことを銘記しましょう。

読書感想文

白い宴（渡辺淳一作）を読んで・・・

小杉　長瀬イト子

「白い宴」は、昭和四十三年八月、札幌医大で和田教授そのチームで行なわれた心臓移植手術をドキュメント風に描いた小説である。

心臓提供者となる青年、江口克彦は蘭島海岸で溺れ、仮死状態で発見され、救急車で一旦は、小樽の病院へ運ばれたが、夜に入って札幌の医大病院へ移される。

執刀者となる重藤教授が、死と認定、心臓病患者、佐野武男に心臓移植を決断、家族への説得、承諾、そして手術決行となる。

それに対し他の教授、医師たちの賛意と反対、提供者としての家族の心境、マスコミ、移植手術約三ケ月後の患者の死亡までを描いている。

その中で、提供者の母は、「母さんは誰が死んでもいいからお前が生きてくれることを今でも一番願っているよ」と仏壇の息子に話しかける。

提供を受けた患者の母は、記者団、医師らに囲まれ、家族の手の届かない所にいる息子に無性の淋しさ、悲しさを感じ、危いと聞いた時は、「どうせ長生き出来ないのなら思いきり我儘を言わせてやりたい」と言っている。

こんな場合、誰もが思うであろう我子を思う親の心に哀れを、親の淋しさを感じる。

最後に、記者同士の会話の中で暗いニュースとしたら死んだ二人は、被害者である。

また、執刀者重藤教授も自然科学の大きな魔性にとり憑かれた一種の被害者ではないかと、そして、心臓移植手術は医学の名をおこなわれた殺人ではないかと言っている。

そうした中で、生とは、死とは何か？心臓死、脳死、死因の判定、そして、死の判定時間に対する疑問、医師か手術を決意した経緯についての疑問など、医者としての重大さ、科学の進歩のためと称し何かをおこなう医学の恐ろしさ、医学の裏側を感じる作品であった。

分館だより

木津分館野球大会

盛大に開催さる！

山崎公民館長の始球式

木津分館主催の野球大会は木津、二本木の十一チームの参加で去る各グランドの整理清掃を野球チーム全員の労力奉仕によって行なわれ、見違いる程整備された処で午前六時全員集合し、塚田グランドで開会式、阿達分館長の挨拶、続いて来賓祝辞は地元選出村議を代表して佐藤議長、永木議員、村体育協会会長佐藤藤男の各氏と山崎公民館長の挨拶を頂き昨年の優勝、準優勝チームより優勝杯の返還がなされた。

次いで選手を代表してバーズチームの阿部選手の力強い選手宣誓があり、始球式には山崎公民館長が往年の名選手振りを発揮したストライク、こんで定められた試合ルールにより熱戦が展開され、兄弟が相対する好プレーも時々見受けられる。

など、見物席から五月二十九日二本木グランド塚田グランドを会場に開催された。

開催を前にして二十二日、順調に進み、午後二時四十五分両グランドの勝者二本木O二本木のんべいずチームの優勝戦を展開し、結果は予想通り昨年の優勝チームの二本木クラブに地区議員杯が、又準優勝ののんべいずチームには地区野球連盟杯が授与され、夏の大会を期して再度し雄を決する事を約し、「万才一」を三唱して散会したのは午後五時を過ぎた頃であった。

（文責・木津分館佐藤主事）

夏の村民野球大会 要綱決る

ふるって参加を！

○大会期日　七月二十四日
　　八月十四日
　　八月十六日
○会　場　焼山グ、沢海グ
○出場資格　村内在住者及横中OB、村内の事業所に勤務するもの
○申込み〆切　七月十八日（必着）
○参加費　一チーム　千円
○申込み、問い合せ　横越村公民館

早起野球

役場チームが"優勝"

第三回早起野球大会は去る六月一日から始まりました。

●役場6—0モクズクB

若い好投手を持つモクズチーム、しかし守備にもたつきがでた。又たんねんにコーナーをついて投じる神田投手（役場）に思うようバットがあわない。準決勝進出は善戦。

●決勝役場5—4沢海好球クラブ

勝者は、個人賞は、興味がそゃがれる中に戦いがはじまった。準決勝ノーエラーの役場チーム、しかし初回に守備がみだれ、3点先取された。あいかわらずカーブを決め球に使う市野瀬投手、然し、いつかはひっくりかえされば四球を選んでは盗塁をこころみチャンスを待つ、六回一死二、三塁加藤捕手が二塁打をはなち2点入る、その後お互に塁上にランナーを進めるが決定打がでないその後お互に点をとりあい4対4になる。そしてむかえた十二回裏二死満塁、市村三塁手の痛烈な二塁ゴロが内野安打となってさよなら勝ち、今回沢海は地元の球場なので、沢海好球クのお奥さん方が七、八人子供連れで、炎天下にかかわらず熱心に応援していたのが人目をひいた。

お互に全力をだしきった見ごたえのある決勝戦でした。尚個人賞は左記の方が選ばれました。

最高殊勲選手　神田勝利　役場。投手
敢斗賞　市野瀬紘一、沢海好クラブ投手
優秀選手賞　加藤藤雄　役場、捕手

文と絵サロン

前横越中学校三年　目黒照美

＜評＞

写生会の時に描いたものです。一点透視による遠近法の構図をねらい、どっしりした実存感を通じさせる作品です。

木の描き方にもう少し工夫がほしいですし、空や木の葉、草の色などに秋らしい色彩が使われたらもっと作品が生きてきたのではないかと思います。

（横中教諭　神田節子）

この作品は、目黒さんが中学生時代に書いたのですが、私共の手違いから在学中に掲載しなかったことをお詫び申し上げます。

（編集部）

プール一般開放の案内

▶開放日　7月17日～8月31日まで
▶日　曜　10時～17時まで
▶土　曜　13時～17時まで
▶平　日　16時～18時まで

マーナを守って楽しいプール

第11回俳句公募!!

～初心者大歓迎～

①公募句題（通じて六句）
◎紫陽花（あじさい）
◎梅雨晴（つゆばれ）
「梅雨明。梅雨の雷」
◎冷奴（ひややっこ）
「冷豆腐」
②〆切　七月二十日（水）
③選者
小野芝春　原一笑
蝦山湖春　小黒愛山
佐藤やすい　阿部春吉
今井南呂　山崎賢鑑
○応募先　横越村公民館